

# フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

毎日の食卓に野沢菜漬け・白菜漬け・大根のたくあん漬けなどの冬の漬物の季節だ。情報誌『信州の発酵食』では信州の食文化の特徴は「保存食だと言っ

ても過言でない」と述べている。

野菜価格が不安定の中、耕作していない農地を活用した取り組みが求められている。ドイツではかつてクラインガルテンという社会運動が起き、都市生活者が地方で農地を借り、耕すことを政府や自治体が後押しした動きがあった。山形県の農村出身の作家、藤沢周平は兼業農家を「土地を

経済効率だけではからず、土地に対する愛着を土台にして物を考えている」と捉えた。押し寄せる開発事業により土地に対する考

え方が大きく変化している。気づかないうちに物事をゆがめて捉えてしまうことを、心理学では「アンコンシャスバイアス(無意識の思い込み)」と呼ぶ。無数にある思い込みに地域の将来に伝えるべ

様に活用してもらおうか。屋外での農作業は心身の健康に良いと言われている。地域経済を担うために移住される方も増えるだろう。近年地場産農産物の出荷者に新たに住民になった名前を多く見受

き姿をどうするかが問われている。特にこれからの農地の在り方を観光要素の中にどう位置付けすべきか。農産物を生育するだけの魅力を、大北地域で生活しようとする多くの皆さんにどの

けられる。地域の土地を愛する人が増えなくなるに違いない。食糧危機に対応する農業技術を誰かが活用できる生活知識を持たなくてはと発想を変えざるを得ないものだ。戦後日本を代表する

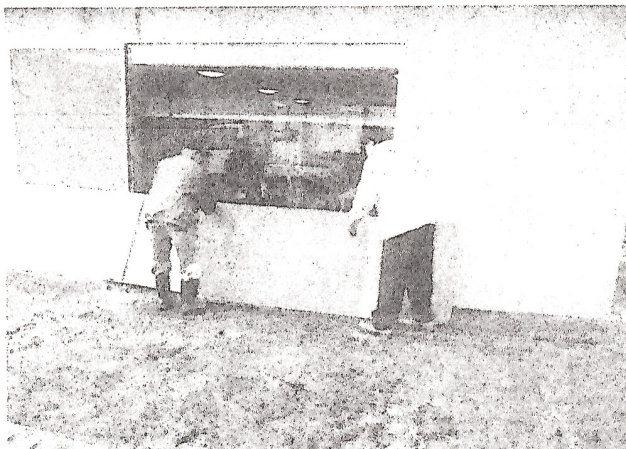
## 危機的な食糧危機に対処する農業知識が求められている

詩人の谷川俊太郎さんが今月中旬に死去した。子供向けの詩集から大人のための愛の詩集など数多くの作品を発表。読みやすく高尚すぎない詩は、ちょっと疲れた時に心に届く、私が好きな詩人だった。ぼくのゆめ」では「えらくならなくていいかなもちにならなくていいいいひとになるのがぼくのゆめとくちになさずにはくはおもつ」は「人に優しくできる人」になろうと何時も心掛けることができた。

「手と心」の詩では「手に手を重ねる手

を膝に置く手を肩にまわす手で頬に触れる手が背を撫でる手と心は仲がいい」。人を手と表現、何か願い事をするとき、ふと手

を合わせる姿は手を肩に押し寄せるべきだと詩が語っているようだ。(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)



白馬・小谷グループの特養白嶺の落ち葉拾い・雪囲作業、晩秋の作業だが充実した時が流れる